

【巻頭言】 附属学校教育局 次長 雷坂浩之「インクルーシブ社会の伸展に向けて」

- 2 ●共生シンポジウムの開催——伊藤僚幸
- 3 ●駒場の探究——教科の枠にとらわれない授業——高3題研究——三井田裕樹
- 3 ●第43回音楽科定期演奏会——熊沢彩子
- 4 ●筑坂3年ぶりの国際交流——北野啓子
- 4 ●高等部1年防災学習——岡本三郎
- 5 ●芸術鑑賞会～音楽を通した国際交流～——杉田葉子
- 5 ●筑波大学留学生との交流会——荒井和枝
- 5 ●令和4年度自閉症教育実践研究協議会——五反田明日見
- 6 ●令和4年度教育実習研究 授業が実施されました——濱田淳
- 6 ●私たちの夢の世界は——高橋叶多
- 7 ●ロイロノートを用いた2年英語科の授業——升野伸子
- 7 ●桐が丘祭開催「弾けろ! Smile&Dream」——藤川華子
- 8 ●朝永振一郎記念第17回「科学の芽」賞表彰式・発表会開催——梶山正明



〔雪吊りの設置〕生物資源環境科学実習Ⅱ（3年次選択科目）

インクルーシブ社会の伸展に向けて

附属学校教育局 次長 雷坂浩之



HIROYUKI
RAISAKA

去る11月13日に、附属中・高等学校の体育館や桐陰会館を会場として、附属学校11校の子どもたちが一堂に介する交流企画がありました。この企画の実施主体は普通附属と特別支援の連携推進委員会によるもので、8年ほど前から教育局が中心となって取り組んでいる筑波型インクルーシブ教育システムの構築を目的としたものです。これまででは障害を有する特別支援学校と普通附属の子どもたちが黒姫高原（長野県）や三浦半島（神奈川県）などで宿泊での共同生活を中心とした交流でしたが、ここ最近はコロナの影響により共同生活の実施を見合わせていたため、例え1日とはいっても附属学校群全校の子どもたちが直接顔を合わせて交流するのは本当に久しぶりのことでした。

今回の交流は附属学校群の子どもたち有志の集まりである「つくばっこ会」に協力をお願いしました。当日は、特別支援学校の子どもたちが自分たちが必要とする配慮事項等を説明した後に、はじめて顔を合わせる者同士が相互に理解を深めるための名刺交換ゲーム、グループでの風船バレーや探索活動、作品作りなどの楽しい企画を通じて、参加した子どもたち全員がとても充実した時間を共有することが出来ました。また、この交流の成果は、12月11日にオンラインによる共生シンポジウムにおいて、約200名の参加者の皆様にご報告させていただきました。なお、交流時に子どもたちが制作した作品は東京キャンパス3階にある展示コーナーで公開しています。（写真参照）



障害者をはじめとした多様な子どもたちと健常な子どもたちが、こうした交流を通じて理解し合う「インクルーシブ教育」はこれから伸展するであろう「インクルーシブ社会」の礎になることを確信しています。これからも「共生社会」の実現を目指す取り組みを継続してまいりますので、附属学校群の子どもたちや教職員を引き続き応援していただけると幸いです。

共生シンポジウムの開催

附属久里浜特別支援学校 校長 伊藤僚幸

12月11日（日）、東京キャンパスを会場に『共生シンポジウム』が開催されました。このシンポジウムは、普通附属と特別支援との学校間で相互交流を行い、附属学校11校の児童生徒の共生社会に向けた意識を育てる 것을 목표로 합니다. 新型コロナ感染拡大防止の観点から、昨年度同様リモートを活用しての実施（一部生徒は参集）となりました。参加者は、児童生徒・保護者・教職員をあわせて208名でした。

第1部は、平川美穂子氏の講演でした。平川氏は幼少期、東京教育大学附属聾学校（現筑波大学附属聾覚特別支援学校）に在籍し、その後、筑波大学・同大学院に進み教育学博士を修得された方です。講演では、障害の特性や性差等を取り上げ、多様性を尊重する社会を如何に構築していくかをお話しくださいました。手話のミニレク

チャーもとても楽しいものでした。第2部は、11月13日（日）に行われた交流行事（附属学校11校児童生徒の対面交流）の実践報告と交流行事に参加した児童生徒による体験発表等でした。各校の児童生徒は、交流行事を通して、コミュニケーションや相手を思いやる気持ちの大切さを発表してくれました。交流行事の企画やシンポジウムの運営に取り組んだ生徒たちの頑張りも見事でした。

コロナ禍、多くの制約がある中での開催となりましたが、本シンポジウムは、児童生徒の心の成長に大いに影響を与える内容だったと感じました。次年度の開催も楽しみです。



質問に答える平川先生（右）



駒場の探究 —教科の枠にとらわれない授業— —高3課題研究—

附属駒場高等学校 主幹教諭 三井田裕樹

「ジャイロセンサを用いたAirMouse及び
ヘッドトラッキングの作成」発表の様子



本校では、「総合的な学習の時間」として、高校2年次に「課題研究」という選択科目を各教科で設定し、様々なテーマでの探究活動を実施しています。そこでは教科の中での学習の

延長になることが多いのですが、高校3年生で希望者が選択する「課題研究」では、更に深化させた探究活動に取り組み、9月に実施される発表会では、まさに「教科の枠を超えた」テーマで多様な発表があります。今年度の発表テーマの中には「聴覚障害生徒の外国語学習」「障害がある学生と進学」「GPSを用いて試合中の走行状況を把握するデバイス」「9軸センサを用いたバットスイングの解析機器の作成」「ジャイロセンサを用いたAirMouse及びヘッドトラッキングの作成」など、インクルーシブ教育や、体育と情報・物理・数学を結び付けたテーマなどが扱われ、参加したSSH運営指導委員の先生方からも絶賛される場面が多くありました。生徒の多くは様々な興味を持ち、学校で得た学びを色々な形でアウトプットします。今年度のテーマを見てもわかる通り、教科の学習の中で得られたことだけではなく、部活動や校外学習、体育祭や音楽祭等の行事を通して経験したことが、生徒の探究心を動かす原動力となっています。文化祭での1万人を超えるお客様を喜ばすための取り組みもありますが、高3課題研究での活動はまさに教科の枠を超えた探求であり、そのアウトプットの機会と言えるでしょう。



「障害がある学生と進学」発表の様子

第43回 音楽科定期演奏会

視覚特別支援学校 教諭
熊沢彩子

筑波大学創基151年
開学50周年記念事業
として、10月6日に第43
回音楽科定期演奏会



が開催されました。音楽科生徒にとっては、今後の演奏家人生の最初の一歩であり、客席の中学部・高等部・専攻科の生徒にとっては、ホールで同世代の演奏家が心を込めて伝える音楽を味わう貴重な機会となっています。

演奏会はたった数時間ですが、そのための音楽科生徒による準備は、長い地道な作業の積み重ねでした。毎日何時間も練習して技術や表現を磨き、それと並行して、客席の生徒たちが楽しめるように、曲目や演奏順を考え、アナウンス原稿を作成して読む練習をし、点字と墨字のプログラムを皆で作ります。リハーサルでは、スムーズな誘導やお辞儀の向きなどを何度も確認しました。当日は雨の中、観客の生徒たちが、バスに乗ったり20分も歩いたりして一堂に会し、美しい演奏や、勇ましい和太鼓アンサンブルを楽しむと同時に、奏でられる音から演奏者の努力を感じ取り、惜しみない拍手を送っていました。

演奏会は演奏者だけでも観客だけでも成り立ちません。音楽を送る人、受け取る人、そして拍手などの反響が力となって、より素晴らしい音楽が生み出される、という循環があってはじめて成立します。今回は音楽を仲立ちとして、舞台と客席の間に温かな交流が感じられる、とても素敵なお演奏会となりました。新型コロナウィルス感染症の予防のため、今までのように一般のお客様に来ていただることはできませんでしたが、早く感染が収束して、より大きな交流の輪が復活するよう祈るばかりです。



定期演奏会和太鼓

筑坂3年ぶりの国際交流

附属坂戸高等学校 教諭 北野啓子

物理の授業で、先生の英語の説明に聞き入るカンベンセン生



筑波大学は、タイのカセサート大学と教育提携を結んでおり、10月下旬に附属カンベンセン高等学校から生徒58名、先生8名が来日しました。1週間の日程の1日、附属坂戸高校を訪問し、3年ぶりの国際交流が実現しました。

歓迎式では、江前校長の挨拶に続き、附属坂戸高校と、その国際交流の歴史について説明。その後、4グループに分かれて、4つの授業を順に見学しました。「数学II」では日本語の説明も板書の数式で理解、「子どもと文化」では、絵本の読み聞かせの雰囲気を楽しみ、「物理」では、楽器の振動面における定常波の観察後、実在する港の模型作成に参加してもらい、筑坂生も一生懸命に英語で説明する姿が見られました。「Practical English」では、Pod Castラジオ番組制作のため、インタビューへの協力を要請。学校生活や放課後の過ごし方について英語の質問に答え、互いに緊張していましたが、筑坂生の一人がタイ語を話せることが分かると一気に場が和み、笑顔一杯の時間になりました。



英語インタビュー
ラジオ番組のための

午後は1年次生全員が体育館で53チームに分かれ、タイ生徒に日本文化を紹介。この日のために準備してきた成果を発揮する傍ら、タイ国内のサイエンスフェアで受賞した生徒5名は3年次生に大気汚染に関する研究およびバジルに含まれる有益な物質に関する研究の口頭発表を披露し、筑坂生に大きな刺激となりました。

最後は全員で集合写真を撮り、別れを惜しみながらバスへ。校舎の窓からいつまでも手を振り続ける筑坂生。短い時間でも心の通う交流となりました。

大気汚染の改善方法について口頭発表。流暢な英語と高度な内容に刺激を受ける3年次生



高等部1年防災学習

附属聴覚特別支援学校 教諭 岡本三郎



令和4年9月16日(金)の16時から高等部1年生を対象に、1泊2日の日程で第1回校内宿泊防災学習を行いました。この学習は自助の力と互助の精神を育むことを目的に、体験的・実践的な防災教育の推進を図るもので

先ず震災学習①としてYouTube「聴覚障害者の災害時に困ることって?」を視聴。クラス毎の話し合いで、各自が自分事として捉え、対処方法を発表することができました。「停電・断水訓練」では、体育館内に発電機を設置、各自プールからバケツ1杯の水をトイレ用と想定して教室のある建物に運びました。「非常食体験」では夕食はカレー、朝食はパンを試食。量は少ないもののイメージしていたよりも美味しいと評判でした。水のいらないシャンプーで「洗髪体験」もしました。「就寝訓練」は1人2枚配布された毛布の1枚を教室の床に敷き寝ました。床は硬いが思った以上に眠ることができたようです。ただ、この状態が何日も続くと不安という意見や枕になるものがあると良いという意見が出てきました。夜に開催した震災学習②は、防災士の方を講師に招いて話していただきました。「このままだとまずいんじゃない。」「こうしておけば安心だね。」に1つひとつ変えていくというアドバイスをいただきました。今回の経験を通して今後の対応、判断の一助にして欲しいと思います。



講義の後に1人ひとりが○○やるぞ!と宣言を考えました



バルーンライトでの夕食(非常食)



芸術鑑賞会 ～音楽を通した国際交流～

附属大塚特別支援学校 中学部主事 杉田葉子

今年度の芸術鑑賞会は、東京文化会館とポルトガルの音楽施設「カーザ・ダ・ムジカ」が連携して行っているワークショッププログラムを本校にて開催しました。全校の幼稚部から高等部までの幼児児童生徒が交代でポルトガル人のアーティストと音楽を通して触れ合いました。また、中学部・高等部とポルトガル人アーティストとの交流会では、生徒たちが手話を交えて歌を披露したり、日本の伝統的なわらべ歌を紹介したりしました。言葉は通じなくても音楽の奏でるリズムや歌が、自然と幼児児童生徒を笑顔にし、心躍る楽しいひと時を過ごすことができました。



高等部生徒より日本のわらべ歌の紹介



音楽家の皆さんと高等部生徒との交流会



筑波大学留学生との交流会

附属小学校 教諭 荒井和枝

昨年の11月、12月に筑波大学在籍の留学生を招き、5年生・6年生の各クラスで交流会を実施しました。今年度は韓国、フィリピン、ミャンマー、オマーン、ブラジル、アルゼンチン、グアテマラの方々と交流することができました。普段接すことのない留学生と時間を共有できる貴重な機会。はじめは「緊張する～！」との声も聞こえましたが、笑顔で接してくださる留学生さんに安堵したのか、果敢に話しかける子どもたち。グループごとに留学生へのQAタイムを設けて紹介ポスター作製にも挑戦しました。もちろん、英語でスラスラと会話はできませんが、互いに知りたいという思いでコミュニケーションを図る充実感を得ることができました。



英語や各国の言語で挨拶から活動スタート



留学生にQAタイムで質問



令和4年度 自閉症教育実践研究協議会

附属久里浜特別支援学校 研究主任
五反田明日見

令和4年12月2日(金)に、「知的障害を伴う自閉症のある幼児児童の課題を踏まえた自立活動の実践～各教科等との関連をおさて～」をテーマとして、オンライン配信で開催し、約180名の方が参加しました。

研究テーマに沿って幼稚部と小学部の実践事例を発表しました。自立活動の指導においては、子供の学習の様子を客観的に評価し、成果をまとめるとともに、教師自身の指導に対しても見直しながら、有効だった指導内容や手立てなどを評価することの大切さを痛感しました。また、各教科等との関連においては、自立活動で明らかになった手立てや配慮を各教科等に生かしながら、相互に関連させて指導の充実を図ることが、幼児児童の調和的な発達の育成につながることを再認識しました。

今後も、子供たちの成長に寄り添いながら、教育活動の充実を目指して研究を進めていきたいと思います。



オンライン会場の様子

令和4年度 教育実習研究授業が実施されました

理療科教員養成施設 濱田 淳

理療科教員養成施設は、「特別支援学校（視覚）」（以下、特支視）における職業教育課程・理療科（理療：視覚障害者が携わる職業の1つで、あん摩マッサージ指圧・はり・きゅうの総称）を担当する教員を養成する施設（2年制）です。

施設2年学生は、9月に「視覚障害指導実習（関東近郊の特支視で実施）」を嚆矢として、教育実習期間に入っています。10月下旬からの約6週間、現職教員の担当授業の参観、指導案作成、授業実習と進んでいき、視覚特別支援教育の実際を認識し、理療の実情に即した内容を指導できるようにしていきます。さらに最終の研究授業では、生徒の学習効率を高めるための創意工夫に富んだ実験的授業が実施されます。これは複数の実習生による共同作業になっています。今年度は、ボードゲーム的要素を取り入れた教材（写真1）、腕の筋肉の働きを認識する教具（写真2）を用いた授業が行われました。これらの実験的授業に対して、指導教員からの様々な評

価が行われるのが「合評会」（写真3）です。担当した実習生は緊張の連続です。学会発表に対する質問のようでもあります。

この後、実習生はもう1つの重要課題である「卒業研究」の仕上げに入ります。この研究論文は、最終発表を経て、「理療科教員養成施設紀要」他の専門学術雑誌等に投稿されます。それを目指して各学生は論文に磨きをかけていきます。

生理学授業 ボードゲーム的要素を取り入れた教材

腕の筋肉の働きを認識する教材

合評会

私たちの夢の世界は



附属高校 桐陰祭実行委員長
高橋叶多

2022年9月。筑波大学附属高校にて、本校の文化祭である桐陰祭を開催いたしました。コロナ禍での開催も3年目。今年はついにコロナ以前の桐陰祭を運営したことがない生徒だけで準備をすることになりました。

しかし、いざ校内各所でのアイデア出しが始まると、巨大な本棚を模した門、全敷地を活用した謎解き企画、巨大な教室内ジェットコースター、換気との関係により制限が加わる中でもこだわった装飾、食べ物の販売ができない中でのカチューシャの販売など、すごいと思うようなアイデアが次々と集まってきました。また、有志で集まり桐陰祭へ参加したいというグループも前年と比べてかなり増加したのです。さらに、在校生以外のお客さんの参加や花火、軽音ライブなど以前の桐陰祭にあったものを復活させるため、感染対策との両立案を考え、先生方とも話し合いを重ねました。正直に言うと、それまでの2年間、今年以上に制限が多い中での開催となり、どこか心の中にぐっと押し込んでいた「こんなことがやりたい」という気持ち、アイデアがそれぞれにあったと思います。今年は、そのような生徒の欲望を解き放ち、生徒それぞれの思いを表現することができた桐陰祭だったと感じています。今年の桐陰祭のテーマは「おとぎの国」。私たちの憧れを詰め込んだ2日間というたった一瞬はまさに「おとぎの国」のようでした。来年の9月にまた無事に桐陰祭が開催されること、そして次回こそはその様子を多くの人に見ていただけることを願ってやみません。



校内の様子



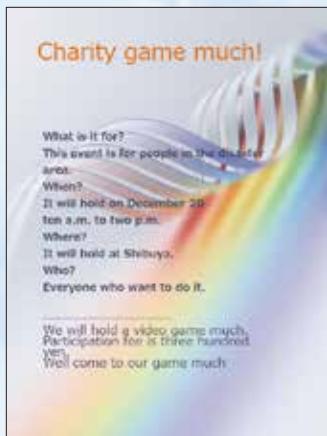
前庭のステージの様子

ロイロノートを用いた2年英語科の授業

附属中学校 副校長
升野伸子

本校が使用する学習アプリのロイロノートには、生徒が提出するカードに音声を張り付ける機能がついています。これを使って2年生の英語の授業では、「架空のチャリティーイベントポスター作製」という課題に取り組みました。各自が作成したポスターに、自身の英語による解説音声を吹き込みました。授業では、クラスメイトが作成したポスターを共有し合い、端末に耳を近づけながら聞いていました。

Aくんの作品



Bさんの作品



Cさんの作品



ご紹介したもののうち、AくんはPPTのポスター素材を利用しました。Bさんは「お絵描きアプリを使ってすきま時間で絵をかきました。フォントもそのアプリを使用して30分程度で仕上げた」そうです。Cさんは、「下の画像3枚は無料素材です。その後、文字を打って、その上から手書き文字を書いて、最後に最初に打った文字を消しました。丸1日くらいかかりました。画像以外はほぼ手書きです」と説明してくれました。みんなとても楽しそうでした。

桐が丘祭開催「弾けろ! Smile&Dream」

附属桐が丘特別支援学校 教諭
藤川華子

11月3日に、桐が丘祭が開催されました。

テーマは、「弾けろ! Smile&Dream」で、コロナ禍での様々な制約を吹き飛ばす新しい桐が丘祭の在り方を模索するものでした。動画制作と教室内からのオンラインでの交流が中心となった過去2年に対して、今年度は小学部と中高等部の動線こそ重ならないように分けたものの、ステージ発表や校内の自由行動は復活しました。当日の保護者の観覧はステージのみ、翌週に展示閲覧期間を設けるなど、感染症対策に留意しながらも、児童生徒間の交流を促すとともに、児童生徒が学習の成果をより共有できるように実施形態を模索しながらの開催となりました。

コロナ禍の制約の中で、児童生徒が自分たちのやりたいことを様々な工夫によって実現する姿が見られたことも今年の特徴でした。

高等部1年の学校設定教科、「職業生活と進路」で

は、駄菓子屋を運営しました。小学部の児童の貸し切り時間を設ける・入室人数を制限する・陳列方法を工夫するなど、様々な対策を講じて、安心・安全とお客様の喜ぶ姿とを両立させることができました。また、高等部生徒会は「あいさつシールラリー」という企画を実施し、コロナ禍で途絶えがちだった学部間での交流を促進、校内のあちらこちらで児童間、生徒間の闊達な交流が見られました。

高3生徒の感想からは、「今年の文化祭は“本当の文化祭”だった」「これで12回目の文化祭が終わったが悔いはない」など、充実感に満ちた声が見られました。



中2の発表、「ビブリオバトル」



バンド部による3年ぶりの生ライブ

朝永振一郎記念第17回「科学の芽」賞 表彰式・発表会開催 (2022.12.17)

附属学校教育局 教育長補佐 梶山正明

12月17日(土)、本学3A棟204講義室において、朝永振一郎記念第17回「科学の芽」賞の表彰式・発表会を開催しました。

「科学の芽」賞は、筑波大学にゆかりのあるノーベル物理学賞受賞者の朝永振一郎博士の功績を称え、それを後続の若い世代に伝えていくとともに、小・中・高校生を対象に自然や科学への関心と芽を育てることを目的としたコンクールです。

今回、国内の学校257校及び海外5か国7校(中国、大韓民国、ハンガリー、イギリス、メキシコ)の日本人学校から小・中・高校生部門合わせて2,328件の応募がありました。その中から小学生部門9件、中学生部門7件、高校生部門1件の合計17件の作品を極めて優秀と認め、「科学の芽」賞を授与しました。

表彰式・発表会には、受賞者17名と付添者16名が出席されました。

本学からは、永田恭介学長をはじめ加藤光保副学長、和田洋副学長、溝上智恵子副学長、金保安則副学長、太田圭副学長、BENTON副学長、加藤和彦副学長、池田潤副学長、服部利明数理物質系長、田中俊之生命環境系長、「科学の芽」賞受賞OG・OBの岡崎めぐみさん、田渕宏太朗さん及び「科学の芽」賞実行委員会委員などが出席し、総勢でおよそ60名となりました。

表彰式は、「科学の芽」賞実行委員会副委員長である雷坂浩之附属学校教育局次長の開会挨拶で始まり、次に永田学長から各受賞者に賞状の授与と祝辞がありました。続いての発表会では、部門毎に受賞者による発表と質疑応答が行われました。受賞者達は、スクリーンに作品の概要を投影しながら研究の成果を報告し、司会者や副学長などの先生方からの質問に身振り手振りを交えて回答していました。

最後に和田副学長から個別の作品へのコメントを含む全体総評があり、「科学の芽」賞実行委員会委員長である溝上副学長の閉会挨拶により無事表彰式・発表会は終了しました。

閉会後、3A207講義室において、「科学の芽」賞OG・OBによるミニ講演会を催しました。講演では、自身の「科学の芽」賞との関わりに触れながら、現在取り組んでいる研究のお話などがあり、受賞者は真剣に耳を傾けるとともに、活発な質疑応答が行われました。その後は、受賞者を囲んで、学長・副学長・系長、OG・OB講演者、実行委員会委員が参加した懇談会が行われ、久しぶりの対面開催ならではの和やかで楽しい時間を過ごしました。

今年度ご応募いただいた皆様、関係者各位に深く感謝を申し上げますとともに、来年度の「科学の芽」賞もどうぞよろしくお願ひいたします。



●広報誌名「ポローニア」の由来

「ポローニア」とは、「桐」の属名であり、Paulowniaと綴る。本誌を「ポローニア」と名づけたのも、筑波大学の紋章に「五三の桐」が使われていることに拠る。しかし、ポローニアを付与した理由が他にも存在する。近代西洋医学を日本に伝えたシーボルトは、日本において、桐が瑞祥の象徴と見なされ、皇室をはじめ高貴な家柄の紋所として用いられていることを知り、Paulownia(後援者のオランダのパウロウナ公妃に因む)こそが植物の桐のイメージを表現していると考え、桐の学名(Paulownia imperialis)に定め、パウロウナ公妃に献呈した。今後いつまでも、多数の読者に愛され続けることを願い、ポローニアの故事來歴やエピソードに基づき、ポローニアと命名した。



発行日………令和5(2023)年2月28日

発行者………附属学校教育局教育長 溝上智恵子

発行所………筑波大学附属学校教育局 広報誌
広報戦略推進委員会

〒112-0012 東京都文京区大塚3-29-1 電話 03-3942-6800

デザイン………スピーチ・バルーン

印 刷………広研印刷 使用紙:U-Himax [日本製紙]

